

Title	天馬の道：中國古代文化の系統論に寄せて
Sub Title	
Author	石田, 英一郎(Ishida, Eiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.46(182)- 71(207)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯東亞文明の始源
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0046

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天馬の道

——中國古代文化の系統論に寄せて——

石田英一郎

コンラディ教授の高弟で、戦後ライプチヒの民族學博物館長の職にあると傳へられる有名な支那學者のエルケス博士は、大戰中の「通報」誌上に「古代中國の馬」と題する一文を發表した。⁽¹⁾これは秦漢以前の牧馬に關する文献的な考證としては相當に整つた注目に値する研究であらうと思はれるが、氏はその冒頭に、中國の家馬は中國の地に於てはじめて家畜化されたもので、これ迄の民族學者や先史學者の多くが考へた様に中央アジアにその起源を有するものではないといふ新説を提唱し、その論據として大體四種類の材料を擧げて居られる。從來獨立の發明とのみ解せられて來た民族の文化財の多くが實は文化の傳播借用に基くものであつたことは、十九世紀末葉以來の民族學が新たに證

明しえた成果の一つであるとはいへ、人類の個々の文化財は必ずしも地球上の一ヶ所に於るたゞ一回の起源を有するのみであらねばならぬといふ理由は存在しない。従つて或る家畜の飼育の如きも、明かな歴史的證據さへあれば、數ヶ所にそれゝ独立の發生地を想定して少しも差支へないわけであらう。たゞ私の見る所によれば、第一にエルケス氏の擧げた四つの論據なるものは、どう考へても積極的な證憑力に乏しく、中には同一の材料が同様の確率を以て氏と反対の結論を導く爲めにも使用しうるものすら見出されると共に、第二には氏の所説と反対の方向を指し示す資料も亦決して少くないのである。先づこの點を指摘することから、本稿の端緒をつかみたいと考へる。

第一の積極的證憑力の不足に關しては、氏の四個の論據

その一は、先史學的な發掘によつて知られた。中國に野生馬の極めて太古から棲息してゐたといふ事實である。すなはち河北の北京人類の遺址からは、人骨や石器に交つて大型の最新世馬 *Equus sarmeniensis* の骨が發見され、其後の舊石器時代遺跡からも、中國家馬の祖先と見られる *Equus prijewalskyi* の骨が出土した。⁽³⁾ 甘肅の新石器時代人が馬を知つてゐたことも、辛店期の土器に描かれた馬の圖が之を證明してゐる。⁽⁴⁾ 山東城子崖の遺跡になると、相當に夥しい數の牛馬の骨がかたまつて發見されて居り、これらが當時既に家畜化せられてゐたことを推測せしめる。故に野馬は中國の地に於て舊石器時代以來人間によく知られてゐたので、西アジアやヨーロッパに於けると同様、新石器時代に至つて之を捕へて馴致するに至つたものである、と主張するのである。けれども野生馬が太古から跳梁してゐたといふことは、最近に至る迄この事實を見た中國の西北邊疆から内陸アジアに連る一帶の草原地方に就てこそ、更により多くの蓋然性を以て言ひ得るのではあるまいか？

偶々死骨の埋没保存に極めて不利な地的條件はこの龐大な地帶の大部を學問的にも未開拓のままに残してゐるとはいへ、此の地帶との比較や關聯を無視して、單にエルケスの擧げた様な斷片的な二三の材料のみを以て説を立てることは早計であらう。況や氏のあげられた四つの遺跡の中、

ルジエヴァリスキ馬らしい骨の出たといふ舊石器時代のそれは、オルドスのシャラ・オゾ・ゴルであり、馬を描いた土器の出土した辛店期のそれは、甘肅省の洮河流域にありて、いづれも中原の地よりは直接内陸アジアに連つた西北邊疆の地點ではないか？

その二是、此の先史學的論據を傍證するものとして挙げられる比較言語學的資料である。氏は曰ふ、すべてのイング・シナ語は馬に對して一つの共通語を有つ。従つて古印度・シナ族はこの動物を既に彼等の分離する以前、その故地に於て知つてゐたのだ。だがインド・シナ族の歴史と移動とに關して知られてゐるすべては、この故地の中國の中央部に求むべきことを示す。馬がインド・シナ族からウラル・アルタイ族に傳へられたもので、その反対ではないといふことは、また馬の稱呼が蒙古語 *morin* 朝鮮語 *mal* の如く、少くとも東アルタイ諸語に於ては中國語 *mar* からの借用語と思はれる事情が之を物語つて居り、このことは從つて、中國から高地アジアに向つての古い馬匹飼育の傳播を語るものであらうと。⁽⁵⁾ 此の論理も遺憾ながら私には納得することが出来ない。エルケスがこゝにすべてのイング・シナ語と稱するのは蓋し誤りで、嚴密には殆んどすべてのタイ・シナ語と言ふべきであらう。何となればインド・シナ語族を構成する今、一つのチベト・ビルマ語群の大半は、

チベット語 ta レブチャ語 on, ta カチン語 gumra 等の如く、中國語やシヤム語の ma とは別系統の語を以て馬を表してゐるのである。而も馬の語を中國人と共有する現在のタイ諸族の大部が、雲南の邊から扇状をなして南下を開始したのは比較的新しい出来事であつて、その大移動は略々西暦の初頃に始まるものと推定されてゐる。⁽⁸⁾ 是より先きタイ・シナ族移動の先驅として最も古く東南アジア半島を南下、現在南ビルマのイラワヂ、サルウイン兩河下流域の山地からシヤムの西部にかけて分布してゐるカレン人は馬を呼ぶに kahi の語を以てし、タイ諸族の様な ma 系統の語を用ゐない。従つてタイ・シナ族の大部並に中國人に接するチベト・ビルマ族の一部が、馬を指す言葉を中

國人と共有することは、毫も中國の家馬が東部アルタイ語系諸民族のそれに先んずるといふ證明にはならず、また今日の蒙古語・朝鮮語・ツングース語・ギリヤーク語などに見る mori, mar⁹ がタイ・シナ語よりの借用だといふ結論も生れては來ない。

その三は、中國の古文献が始めて馬を牧した幾多の文化英雄的的人物の存在を傳へてゐることで、これが如上二つの論據と同一の結論に導くものとして擧げられてゐる。例へば「呂氏春秋」卷十七¹⁰には、

大橈ハ甲子ヲ作り、黔首ハ虜首ヲ作り、容成ハ屢ヲ作

リ、羲和ハ占日ヲ作り、尚義ハ占月ヲ作り、后益ハ占歲

ヲ作り、胡曹ハ衣ヲ作り、夷羿ハ弓ヲ作り、祝融ハ市ヲ作り、儀狄ハ酒ヲ作り、高元ハ室ヲ作り、虞匄ハ舟ヲ作り、伯益ハ井ヲ作り、赤冀ハ臼ヲ作り、乘雅ハ駕ヲ作り、寒袞ハ御ヲ作り、王冰ハ服牛ヲ作り、史皇ハ圖ヲ作り、巫彭ハ醫ヲ作り、巫咸ハ筮ヲ作レリ。コノ二十官ハ聖人ノ天下ヲ治メシ所以ナリ。

と云ひ、「荀子」¹¹には、

倕ハ弓ヲ作り、浮遊ハ矢ヲ作りテ、羿ハ射ニ精シク、奚伸ハ車ヲ作り、乘杜ハ乘馬ヲ作りテ、造父ハ御ニ精シ。古ヨリ今ニ及ズマデ、未ダ嘗テ兩ニシテ能ク精シキ者アラザルナリ。

と曰ふ。エルケスはこれら傳説の文化英雄中の乘雅、乘杜を以て、太古中原の地に始めて野生馬を家馬にまで馴致した歴史的記憶を語るものとなし、もし家馬が例へば猫の如く外部から輸入せられたものであつたならば、その發明者を崇拜する様な記録は残らない筈であると主張するのである。加之、「荀子」に所謂乘杜は楊倞の註によれば相土に同じく、相土は「世本」に殷の祖契の孫とされてゐるから、殷文化の英雄であつて、従つて古代牧馬の一中心は東部河南の殷文化の形成地に求めらるべきであり、他方「周禮」

司馬政官之職に、校人が『夏ハ先牧ヲ祭ル』といひ、或は庶人が『閑

ノ先牧ヲ祭ル』とある先牧なるものが、鄭玄によつて『始

は、餘りにも多くの問題を持ち過ぎてゐるのである。

メテ馬ヲ養フ者、其ノ人未ダ聞カズ』と注せられてゐる所より、これ亦前記殷の乘杜とは別個に、周で祭られた育馬の創始者であり、その固有名詞の傳へられることは、恐らく古代牧馬の他の一中心をなした夏の文化から傳へられたためであらうと論じてゐるのである。エルケスのこれらの

主張の前提には、彼自らも言明してゐる様に、中國文献に見る古傳の古さと信憑性とが、考古學的發掘によつて益々確認せられて來たといふ信念が横はつてゐることは言ふま

でもない。私は周代以後の中國古典に對するこの様な取扱ひ方が、果して科學的に成り立ちうるものであるか否かの問題は、一と先づ之を我が國専門學者の批判に委ねたいと思ふ。たゞ我々民族學者の經驗によれば、多くの民族乃至種族がその有する個々の文化財の發明を其の功に歸する文

化英雄の傳說は、何等その文化財の獨立起源もしくは外部よりの傳來の問題を決定する資料とはなりえないといふ事實を指摘して置きたい。もし前記乘雅や乘杜の名が家馬の中國起源を證するものとするならば、同様の程度に於て、胡曹の衣、夷羿の弓、儀狄の酒、虞紂の舟、伯益の井、乃至は倕の弓、浮遊の矢、奚仲の車に就ても亦その中國起源を主張しうるであらう。然るに我々今日の民族學上の知識は、これらの文化財に對してこの様に簡単な結論を下すに

(185)

その四は周代の儀禮に見る牛馬供儀の方式である。他の

犠牲獸がいづれも刺殺もしくは撲殺されるのに對して、ひ

とり牛馬のみは矢を放つて射殺されることになつてゐる。これは此の二者が中國の土地に野生の狀態で狩獵の對象となつてゐた時代の記憶を留めたものであらうと言ふ。そしてエルケスのこの議論の基礎は、

『凡ソ祭祀ニハ牲ヲ射ルノ弓矢ヲ共ス』「周禮」司馬政官之職司弓矢

『牲ヲ射ルハ親ラ殺スヲ示ズナリ。牲ヲ殺スハ尊者ノ親

ラスル所ニ非ズ。惟ダ射ノミ可ト爲ス』同上注

『天子ハ禘郊ノ事ニハ必ズ自ラソノ牲ヲ射ル……諸侯ハ宗廟ノ事ニハ必ズ自ラソノ牛ヲ射、羊ヲ剗シ、豕ヲ擊ス』

「國語」卷十八楚語下

などの字句に在るらしい。今これらの『牲』の字に果してよりの傳來の問題を決定する資料とはなりえないといふ事實を指摘して置きたい。もし前記乘雅や乘杜の名が家馬の中國起源を證するものとするならば、同様の程度に於て、胡曹の衣、夷羿の弓、儀狄の酒、虞紂の舟、伯益の井、乃至は倕の弓、浮遊の矢、奚仲の車に就ても亦その中國起源を主張しうるであらう。然るに我々今日の民族學上の知識は、これらの文化財に對してこの様に簡単な結論を下すに

說を相當に立證したことと前提とし、副次的にそれを傍證

する材料として最後に之を附加したものであらうが、此の供犠の方式も、また家馬の馴致そのものも、中國に起源を有するか或は邊疆から輸入されたものであるかは、別途の證明を要する問題なのである。

之を要するにエルケスの擧げた以上四つの論據は、その一々に就ては勿論、たとへそれらを綜合して觀察しても、家馬の中國本土起源説を立證するだけの積極的證憑力に缺くる所があるばかりではなく、氏の立論には寧ろいづれにも解釋せられうる事實をば、強ひてこの新説に都合のよい様に附會した跡すら認められるのである。

II

そこで私は第二に、中國に於る家馬の源流に關し、エルケスの所説とは反對の結論に我々を導く事實も亦數多く存在することを指摘したい。その最も大きな反證は、蓋し中國の全古代史を通じて、馬匹の補給はもとより、凡そ馬に關する新知識、新技術の導入には、常に西北邊疆から内陸アジヤの草原地帶に連なるルートが問題の前面に現はれるといふ點であらう。比較的新しい時代から順次に遡つて例を取るならば、かの張騫鑿空に端を發する前漢の武帝の國帑を傾けた前後二回のフェルガーナ遠征(104—101 B. C.)が、いはゆる大宛の汗血馬を得て匈奴に對抗しうる優秀な

騎馬部隊を編成せんとする目的に出でたことに就いては、これ迄も屢々史家の考證した所であつた。⁽¹⁰⁾既に武帝の即位に先んずる二十年の昔、名臣鼂錯が孝文帝に兵事を上言して、

今匈奴の地形技藝中國ト異リ。山阪ヲ上下シ、溪澗ヲ出入スルハ中國ノ馬與カザルナリ。險道ニ傾仄シ、且馳セ且射ルハ中國ノ騎與カザルナリ。〔前漢書〕卷四十九爰蓋鼂錯傳)

と喝破した言葉には、如實にこの間の消息を盡した感がある。而もその後如何に塞外の駿馬が漢民族にとつて重大な關心事であつたかは、次の如き武帝の世の順次の記録が之を物語るであらう。

元朔三年(126 B. C.) 張騫大月氏より歸り、西域の新知識を齎す。中に大宛に就て曰ふ、善馬多し、馬血を汗す。其の先は天馬の子なり、と。〔史記〕卷一二三 大宛傳。〔前漢書〕卷九六 西域傳上)

元狩二年(121 B. C.) 馬朔方の北余吾水中に生ず。〔前漢書〕卷六 武帝本紀)

元狩三年(120 B. C.) 馬渥洼水中に生じ、太一天馬の歌を作る。中に『赤汗ヲ霑シテ沫流赭シ』の句あり。〔前漢書〕卷二十一 禮樂志)。渥洼は甘肅省北部にあつたらしい。

今日敦煌の南月芽泉の傍には『渥洼池』の名を刻した石

碑が建てられてゐる。

元鼎二年(115 B. C.) 張騫烏孫に使し、烏孫使數十人馬數

十四匹を遣して報謝す。後烏孫匈奴の攻撃を恐れ、使を漢に遣して馬を献じ、漢女を得て昆弟とならんことを願ふ。

初め天子易を下するに云ふ、神馬當に西北より来るべしと。烏孫の馬を得るに好し。名けて天馬と曰ふ。後大宛の汗血馬を得るに及び益々壯。更に烏孫の馬を名けて西極と曰ひ、大宛の馬を名けて天馬と曰ふ。(「史記」卷一二三 大宛傳)

元鼎四年(113 B. C.) 六月寶鼎を后土祠の旁に得、秋馬渥

渥水の中に生ず、寶鼎天馬の歌を作る。(「前漢書」卷六 武帝本紀)

元封四年(107 B. C.) の頃、烏孫千匹の馬を以て漢女を聘す。漢宗室の女江都の翁主を遣りて往いて烏孫に妻はしむ。(「史記」卷一二三 大宛傳) これが有名な望郷の哀詩を残した江都王建の女細君である。

太初元年(104 B. C.) 大宛王貳師城の善馬を漢の使に與ふるを肯ぜず、李廣利第一回の大宛遠征となる。成功せず。(同上)

太初三年(102 B. C.) 漢再び大軍を發して宛を降し、其の

善馬數十匹中馬以下牡牝三千餘匹を取る。(同上)

太初四年(101 B. C.) 李廣利の軍還る。『天馬ノ徠ルヤ西極從

リス 流沙ヲ涉リテ九夷服ス』云々の西極天馬の歌を作

る。(「前漢書」卷二二 禮樂志)

太始二年(95 B. C.) 渥渥水天馬を出し、泰山黄金を見る。

(「前漢書」卷六 武帝本紀)

以上の中天馬の歌の作られた年代などには前後の重複や混同らしいものも窺はれるが、これらすべての記録を一貫して、朔北乃至西域よりする良馬の補給といふことが、當時の漢政府にとつて決定的な死活の問題であつたことを推定しうるのである。

稍々降つて宣帝の世にも、馮奉世が大宛に至つてその名馬の龍に象たるものを得て歸つたことが傳へられ(「前漢書」卷七十九 馮奉世傳)、他方同帝の世に編せられた桓寬の「鹽鐵論」によれば、武帝沒後の財政打開に關する討論に於て、

武帝の外征を辯護せんとする者は『内郡ハ人衆ク、水泉薦ム』(卷四 廣武) これが有名な望郷の哀詩を草モ相贍ス能ハズ、地勢溫溼ニシテ牛馬ニ宜シカラズ。』

孝武皇帝百越ヲ平ゲテ以テ匱匱ト爲シ、羌胡ヲ卻ケテ以テ苑囿ト爲ス。是ヲ以テ珍怪異物後宮ニ充チ、駒騏駙馬ノ用ヲ損ス。是ヲ以テ鹽驢駝尾ヲ銜ミテ塞ニ入り驢驢驢馬盡ク我畜ト爲ル』(卷一) と論じて、邊郡の利亦饒なる所以を強調してゐる。右の文中、駢驢は西方より先づ匈奴に

輸入されたアリヤン馬即ち先の汗血馬の類であり、駒騮と驛驥とはそれとも蒙古土産の野生のプルジエヴァリスキー馬及び野生驢馬を捕へて家畜の群に加へたものであらうとは、既に江上波夫氏によつて新たな考證研究の爲された所であるが、我々は右の一文によつても、これらの馬屬が當時陸續として塞外から『牛馬ニ宣シカラザル』内郡に補給された状を想像しうるであらう。

武帝の大宛遠征は中國文化史上に幾多の重要な意義を有するものであるが、馬匹の歴史に就いていへば、從來稀に匈奴を通じて入手してゐたかと思はれる西方の改良種——フェルガナ、バクトリヤ、バルチヤ、メディヤ、ペルシャ、アルメニア等を中心に廣く飼育された駿足のアリヤン馬——が、直接西域からこの國に輸入される緒となつたものであらう。それまでの中國馬も、また朔北遊牧民の普通の馬も、恐らくブルジエヴァリスキー馬の系統をひいた、頭の大きい、齧の立つた、脚の短い、尾毛の長い小型のものであつたことは、例へば長安北方の有名な霍去病墓前石馬からも、又匈奴の作らしいオルドス青銅器の或る物(口繪B参照)⁽¹²⁾からも窺ひうる所である。然るに山東の孝堂山石室の畫象石になると、右の矮軀の土產馬の多くの特徴を有する馬を現した雜兵騎戰の圖の上に、別に從來見られなかつた收縮したポーズで、後肢を踏み込み、前軀を起揚し、項を屈撓した

特殊の調御になる新しい型の騎馬を連ねた貴人の行列とも思はれる畫面が刻せられて居り、その馬種も頭が比較的小さく、頸部及び四肢のがのびやかに發達してゐて、前者とは明かに系統を異にするものらしい(口繪A参照)。イエツツ氏はこのボーデや體軀を大英博物館のバクトリヤーマケドニヤ、キレーネ等の古貨幣に刻せられた諸種の騎馬像と對比して、漢代の藝術にあらはれた此の形式の多くのものが、西紀前二世紀以來ヘレニズムの文化圏から齎された貨幣の刻印によつて定式化された手法であることの可能性を指摘すると共に、また漢代の明器泥像に見る馬の形のギリシヤの彫刻のそれに酷似してゐることは、西方改良種の實物の模寫と解しうることをも論じ、今後の研究の考古學的發掘による馬骨の調査に俟つべき旨を述べてゐる。⁽¹³⁾

中國の馬史にとつて次に劃期的な出來事は、更に二世紀を遡る西紀前三〇七年、趙の武靈王が北狄や隣國の脅威に對抗するため、胡服騎射の制を採用したといふ記録である。それまでの中國の戰鬪形式は専ら戰車によるものであつて、從前の文献に散見する『乘』の文字がいづれも駕車の意に解しうべきことに就ては、エルケスも詳しい論證を行つてゐる。『軍』の文字も車を以てする圓圍、すなはちWagenburgの陣形を表したものであらう。然るに車上の移動住居を以てする此の種のキャムプの形式そのものは、

古くから内陸の遊牧民に見受けられたものらしく、西紀前數世紀のスキタイから、紀元後十三世紀の蒙古族に至るまで、各種の遊牧民族に就て、かうした『巡歷する都邑』のことが記述されてゐるのである。⁽¹⁵⁾ たゞ中國にあつては車戦の法のみ發達した間に、車を専ら移動式住居すなはち穹廬として用ゐた北狄は、⁽¹⁶⁾ 他方戰鬪の形式としては、鼈錯の所謂『險道ニ傾仄シ且馳セ且射ル』騎射の法に異常な進歩を示し、中國の戰車や歩兵の部隊を壓倒するに至つたのであつた。故に先づ北邊の趙に於て武靈王が中華の傳統と古俗を棄てゝ胡風に倣つたのは、全く民族存亡の問題の然らしめた所とはいへ、而も此の事柄が保守自尊の念に強い漢民族にとつて如何に重大な革命を意味したかは、「戰國策」や「史記」に書き残された武靈王のなみ／＼ならぬ決意と、群臣や公子の反対を論破し説得してその所信を貫くまでの異常な努力とが、之を雄辯に物語つてゐる。

『今中山ハ我ガ腹心ニ在リ。北ニハ燕有リ、東ニハ胡有リ、西ニハ林胡・樓煩・秦・韓ノ邊スル有リ。而ルニ疆兵ノ救無シ。是レ社稷ヲ亡フヲ奈何ゼン。夫レ世ニ高キノ名有ルモノハ必ズ俗ヲ遺ヅルノ累有リ。吾レ胡服セント欲ス』

『今吾レ將ニ胡服騎射シテ以テ百姓ヲ教ヘントス。而モ世必ズヤ寡人ヲ議スルヲ奈何ゼン』

所ハ賢者焉ヲ察ス。世我ニ順フ者有ラバ胡服ノ功未ダ知ル可カラザルナリ。世ヲ驅リテ以テ我ヲ笑フト雖モ胡ノ地中山ハ吾必ズ之ヲ有タム』⁽¹⁷⁾ 「史記」趙世家

『吾レ胡服ヲ疑ハザルナリ。吾レ天下ノ我ヲ笑ハソコトヲ恐ル、ナリ。狂夫ノ樂ミハ智者焉ヲ哀ム。愚者ノ笑フシテ國ニ便ナルハ必ズシモ古ナラズ。聖人ノ興ルヤ相襲ラズシテ王タリ。夏殷ノ衰フルヤ禮ヲ易ヘズシテ滅ビヌ。然ラバ則チ古ニ反クハ未ダ非トスペカラズ。而シテ禮ニ循フハ未ダ多トスルニ足ラザルナリ』⁽¹⁸⁾ 「史記」同上 といつた調子で、論破に是れ努めたのであつた。

だが車戦より騎戦への轉換と從つて乗馬民族の服制の採用とは、亞歐大陸の西及び南部の文化諸國に於ても亦、西紀前十二世紀の頃に始つて見受けられた過程であつて、中國に於る此の問題が、古代のヨーロッパやオリエントに於るそれと關聯して如何に理解さるべきものであるかは後に改めて考へてみたいと思ふ。

以上漢武の求めた烏孫の名馬や大宛の汗血馬と趙の武靈

王の採用した胡服騎射の制とは、中國古代の馬種や馬術に關する二つの飛躍的な進歩がいづれも朔北乃至西域の遊牧系民族の地帶から齎されたことを示すものであるが、更に遡つて中國の歴史を辿るならば、この様な出来事は、太古から繰返されて來た類似の過程の一例に過ぎぬことを知りえないであらうか？恐らく西藏系種族かと思はれる周代の西戎に關しては、「竹書紀年」に周の孝王の五年(867 B.C.?)來つて馬を獻ずる文字が見え、同じく夷王の七年(854 B.C.)には、虢公師を帥ひて太原の戎を伐ち、愈泉に至り、馬千匹を獲たといふ。「荀子」卷九 王制篇に「北海ニハ則チ走馬吠犬アリ。然ルヲ中國得テ之ヲ畜使ス。……西海ニハ則チ皮革文旄アリ。然ルヲ中國得テ之ヲ用フ」とあるのも、西北邊疆の畜産を指すものであらう。又北方遊牧民に關するこの國最初の纏つた記録と思はれる「史記」の匈奴傳を見るに、『畜ニ隨ツテ牧シテ轉移ス。其ノ畜ノ多キ所ハ則チ馬牛羊、其ノ奇畜ハ則チ橐駝・驢・驥・駒駝・駒駢・驢駢』とあつて、その橐駝（駱駝）以外の驢・驥（驥）をはじめ、駢駢・駒駢・驢駢なるいはゆる奇獸が、いづれも馬屬に屬するといふ江上氏の研究に就ては既に述べた如くであり、戰國の末迄驢や驥さへ飼はなかつた中國と較べて、遙かに畜馬の進歩してゐたことを示す。冒頓單于が父を殺して自立した時にも、東胡の乞に應じて匈奴の寶馬といはれる『千

里ノ馬』を與へてゐる。漢の高祖が歩兵三十二萬を以て冒頓の詳り走るを逐つた時にも、歩兵未だ盡く到らざるに冒頓精兵四十萬騎を縱つて帝を白頭に圍んだ。七日漢兵中外相救餉するを得ず、匈奴の騎、其の西方は盡く白馬、東方は盡く青驥馬、北方は盡く烏驥馬、南方は盡く驛馬であつたといふ。更に同單于が孝文帝に送つた書中には『天ノ福、吏卒ノ良、馬ノ疆力ヲ以テ月氏ヲ夷滅シ、……樓蘭・烏孫・呼揭及ビ其ノ旁ノ二十六國ヲ定メ、皆以テ匈奴ト爲ス』と豪語してゐるのである。これらの記録は漢代のものであるとしても、匈奴は既に戰國の世に、この様な騎馬戰術の卓越を以て朔北に霸を唱へたことを忘れてはならない。同時に、中國に於ける產馬の中心地も亦、古來常にこれらの諸國であつた、「左傳」昭公四年に『冀ノ北土ハ馬ノ生ズル所ナレドモ、興レル國ナシ。險ト馬トヲ恃ムハ之レ以テ固シト爲スベカラザルナリ』の句があり、「呂氏春秋」卷十四 長攻に、趙の襄子の『代ヲ善ミスル所以ノモノハ乃チ萬故ナリ。馬郡ハ馬ニ宜シ。代君善馬ヲ以テ襄子ニ奉ズ。襄子代君ニ謁ゲテ之ヲ觴セントヲ請ヒ、馬郡盡ク』といふ事件を見るので、皆これら北邊の諸國の良馬に關するものである。蘇秦が始めて秦の惠文王を說いた時にも、『大王ノ國ハ西巴蜀漢中ノ利アリ。北ニ胡貉代馬ノ用アリ、……戰車萬乘、

奮擊百萬、沃野千里、蓄積饒多ニシテ地勢形便ナリ。此レ所謂天府ニシテ天下ノ雄國ナリ。大王ノ賢ト士民ノ衆ト車騎、ノ用ト兵法ノ教トヲ以テセバ、以テ諸國ヲ併セ天下ヲ呑ミ、帝ト稱シテ治ム可シ。願ハクバ大王少シク意ヲ留メヨ』〔戰國策〕三
秦惠文君と勧め、張儀も亦韓の襄王に秦の兵馬の盛なるを説くに『秦馬ハ良、戎兵ノ衆、前ヲ探リ、後ヲ^ア跌ミ、蹄間三尋ニシテ騰ル者、勝ゲテ數フベカラザルナリ』〔同上〕八
韓襄王を始め、古の善く馬を相する者として、『寒風是ハ口齒ヲ相シ、麻朝ハ頰ヲ相シ、子女厲ハ目ヲ相シ、衛忌ハ鬚ヲ相シ、許鄙ハ腕ヲ相シ、投伐褐ハ脣脅ヲ相シ、管青ハ臍脇ヲ相シ、陳悲ハ股脚ヲ相シ、秦牙ハ前ヲ相シ、贊君ハ後ヲ相ス。凡ソ此ノ十人ハ皆天下ノ良工ナリ』と『呂氏春秋』〔卷二十〕
〔表〕に列舉せられた名人に就ても、その知られうる限りに於ては、悉く秦及び趙の出身者であることをエーバーハールトは指摘してゐるといふ。(17)これらの事實を前記塞外遊牧民族の豊富な馬群と併せ考へるならば、中國牧馬の歴史の北乃至西北邊疆に續く内陸アジア草原地帶と相關聯することを疑ふことが出來ない。

然るに先にも述べた様に、殷及び夏の文化の中にそれぞれ高度に發達した牧馬の中心地を想定するエルケスは、『左傳』僖公十五年(645 B.C.)の條に、『古ハ大事ニハ必ズ

其ノ產(國產の馬)ニ乘ル。其ノ水土ニ生レテ其ノ人心ヲ知リ、其ノ教訓ニ安ンジテ其ノ道ニ服習ス。唯ダ之ヲ納ルル所ノママニシテ志ノ如クナラザルコト無ケレバナリ』とある字句などに基き、周代には既に中原の諸國皆いづれもそれをぐの土産の馬を育成してゐたもので、それが漢民族農耕地の不斷の擴大の結果、從前の牧地が益々挾められ、遂に漢人の植民の最も稀薄な北部の諸國が、最も集約的な產馬の中心地となつて、土產の馬を以ては足りない他の諸國にも馬を補給する様になつたものであると主張するのである。(18)

こゝに於てかうした考へ方が果して當を得たものであるか否かを決するため、次に以上文献資料による歴史時代の考察から、更に一步を進めて原史及び先史時代の材料を今一度検討してみなければならない。そしてこの目的のためにには、中國の先史時代に當る西紀前第三・第四千年紀にすでに歴史時代に入り、その發達した文化に關する知識のかなり明らかになつてゐる古代オリエントの地帶を南縁に控へた亞歐 Eurasia 大陸、乃至は亞歐阿 Afreurasia 大陸を一塊として觀察することが、頗る効果的である。

今日迄の先史學上の知識の示す所によれば、家畜化され

III

た馬や駱駝の類の骨と信ぜられるものは、既にエヂプト及びメソポタミヤの新石器時代遺跡から出土してゐるさうである。この事實をメンギーン教授は、新石器時代の或る時期以後、それまで此の地方に全く知られなかつた單鋸式鎌、叉状の矢鎌或は槍鎌、往々柄部の細くなつた斷面圓形或は多角形の矢鎌或は槍鎌など、彼が後期舊石器時代の骨器文化の系統を引くものと考へてゐる諸要素が、俄かに見出される様になる事實と結合して、同じく北ユーラシアの骨器文化の發展を多分に含む内陸アジヤの騎獸飼養民文化の南下した痕跡と解釋した。⁽¹⁹⁾ 然るに如何なる理由によるものか、歴史時代に入つて以後の古代オリエントの文明の中には、騎獸の飼育はアフリカで家畜化されたかと思はれる驢馬を除いて、久しい間見受けられなかつた。即ち古代埃及人は、紀元前十八世紀中葉、戰車の上よりする射術に長けたヒクソスがアジヤから侵入する迄は馬を知らなかつたし、其後クレータのミーノア文明の遺品に馬や戰車が登場するのも埃及の第十八王朝と並行する西紀前一五〇〇年頃である。他方アーリヤが軍馬と戰車を携へてパンダーラブの地に侵入を開始したのは、正にこれらと相前後する前十六世紀の頃であつて、先アーリヤ期の印度先住民族として印度古代文明の基層を築いた所謂ドラヴィダ系民族や、更に遙か遡つて之と近親の關係があるらしい古インダス文化

が未だ家馬を有しなかつたことを亦略々疑ない。⁽²⁰⁾ たゞメソポタミヤにあつてのみは、問題は稍々複雑となる。從來の通説では、西紀前約二千年のハムラビの法典中に一言も馬匹に言及してゐない事實を以て、當時この地方がまだ馬を飼育しなかつた證據と考へられて來た。然るに近年に至りウーリイが古代スュメールの都ウルの王墓から發掘した手綱の環の上に立つ精巧な馬形像や、壁間のモザイクに描かれたり、石灰石板の上に浮彫された戰車を牽く動物などをめぐつて、發掘者のウーリイ自身はあく迄その驢馬なることを主張するに對し、是より先き豫てマイスナーなどと共に、西紀前第三千年紀のスュメールの遺物の中にも驢馬乃至馬と判定すべき動物像を認めうることを指摘して來たヒルツハイマーは、その少くとも驢なること、従つて紀元前三千年を超える當時、すでにこの地に馬の存在したことを主張している。⁽²¹⁾ 然るにウーリイの發掘に次いで一九三〇年、メクナンは東の方エラムの、やはり第四千年紀の末に當るスーサ第一層と第二層との中間から骨片に刻まれた恐らく世界最古の騎者像と思はれるものを發掘、また同じ頃のエラム國に相當高度に發展した馬・驢・驥の飼育の行はれてゐたことを示すと解せられる馬匹系譜様の古記録も發見された⁽²²⁾。これらの事實を西トルキスタンのアナウ第一文化層における最初の家馬の痕跡を紀元前第四千年紀の⁽²³⁾

後半と推定し、又メソポタミヤに於て馬を指す最初の文章⁽²⁴⁾



第一圖 世界最古(?)の騎馬(?)像

大陸の内地から馬を携へたヒクソス、カツシュー、アーリヤ

などが、從前
殆んど或は全
く馬を知らな
かつた印度よ
り東地中海に

至る古代文化
地帶に侵入を
開始してゐる

事實は、軍事

的に組織され

た或る強力な

馬匹飼育民の

移動の波が、

何等かの理由

によつてこの

時代にアジヤ

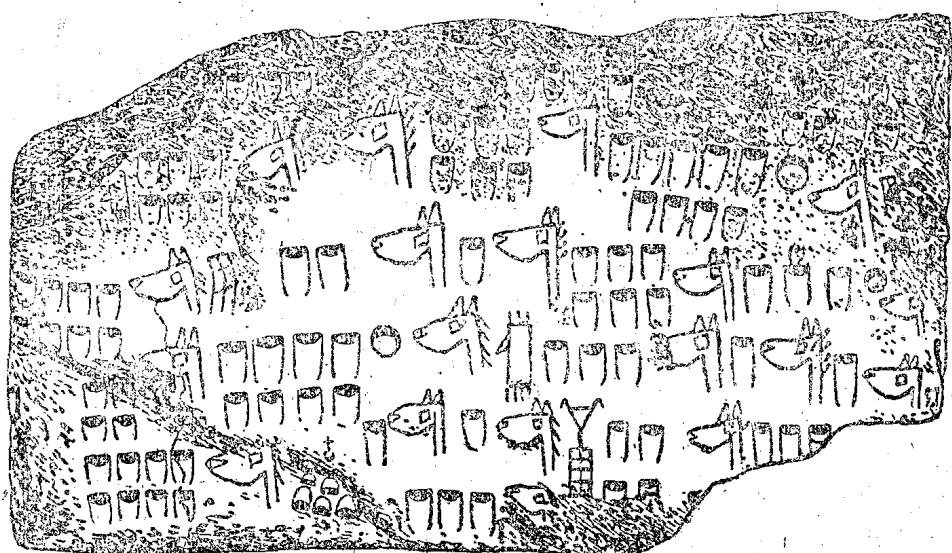
内陸から溢れ

出でたことを

物語るもので

あらう。ヨーロッパに向つたインドゲルマンの大移動もこ

じめて急速に西南アジヤ一圓に普及し、やがてメディヤ、アルメニヤなどが名馬の產地として喧傳される様になつたのであつた。⁽²⁷⁾ 卽ち紀元前第二千年紀の前半に至つて、亞歐



第一圖 古代エラム國馬匹系譜圖(?)

而も小アジアの Kültepe 北カウカスの Maikop スカンヂナヴィヤの Schonen シベリヤの Minussinsk など内陸の縁邊に發見された最初の家馬の痕跡と思はれる遺物が、いづれも西紀前二〇〇〇年乃至はその稍々以前と推定されてゐることも亦、或はこの事實に關係があるのかも知れない。そして中國の新石器時代遺跡の中でも、遙か東方の山東城子崖黒陶文化の中に、突如夥しい馬骨が現れ、次で殷の文化には當初から發達した馬の飼育が行はれてゐることが、豚と犬との骨のみ多い從前の中國新石器時代遺跡との間に若し判然たる hiatus を示してゐるとするならば、これ亦エルケスの言ふ様な中原の地に於る徐々の家畜化の跡を示すものではなくて、やはり前第二千年紀の前半に於る、西方内陸よりする外來文化要素の出現として解釋出來ぬものであらうか？

しかも以上の過程には今一つの興味ある問題が結び付く。即ち右のヒクソスも、カッショも、インドゲルマンも、皆騎戦の民族ではなくて車戦の民であつた。そして戰車の形態、馬匹の種類、戰車の神々等の遺物に見る古代オリエント—インンドと古代ヨーロッパとの間の著しい一致は、これらが戰車を中心とする一大民族の文化移動のあらはれであることを示す。この民族の文化移動の中心的役割を演じたものは、インドゲルマン系の諸民族であつて、カスピー亞

ラル間の低地に幾多の同族を残しつゝ、古代オリエント及び印度に向つたインドイラン族の一群の外、今一つのインドゲルマンの戰車部隊はドナウ地方とギリシャとに侵入したのであつた。かくて紀元前第二千年紀には駕乘と車戦とがインドからヨーロッパに亘つて普及したのであつたが、西紀前十二世紀を境として再びこの形式に新しい革命が起つた。それは中央アジアの騎馬遊牧民との接觸による騎乗特に騎戦の採用であつて、オリエントに於ても、ヨーロッパに於ても、共に十二世紀の頃から考古學的遺物の上に騎兵が出現する。ヨーロッパではケルト人を最後として完全に騎戦が車戦に取つて代つたが、ひとりギリシャ人及びローマ人のみは、なほ永く戰車を固執した。又オリエントでも、騎兵が戰車の支配を破つて之に代つたのは、iran 及び小アジアに於てのみである。先に戰車の傳播が明かにインドゲルマンを中心とする民族文化移動の結果であつたのに對し、この騎馬戰術の侵入の過程に於ては、又幾多内陸アジア遊牧民の文化財が古代ヨーロッパとオリエントに齎されたのであつた。その最も顯著な一例は、iran 人、トルキヤ人、ゲルマン人、ケルト人などに採用された騎乗用ズボンであるが、ギリシャ人、ローマ人をはじめ、戰車を固執した民族には之が傳はつてゐない。⁽³⁰⁾ 以上の概觀は再び紀元前十二世紀より以前に始まるアジア内陸の騎乘遊牧民

族の一大運動を示唆するものであらう。但し我々は今日その具體的な過程を知るに足るだけの資料を有しないけれども恐らくはこの過程の連續と思はれる其後のスキタイ族の跳梁の歴史は、蓋しこの種騎馬遊牧民の運動の典型として教ふる所が頗る多い。

そこで問題となるのは、いづれも亞歐大陸の内部に起つたと思はれる車行及び騎乗の二つの形式が、文化史的に本來如何なる相互關係にあつたものであらうかといふ點である。騎乗の形式が必ずしも車行に遅れて後に發明されたものであると言ひ得ないことは、先に挙げたエラムのスーサから發掘された騎馬像の古さが之を物語つてゐる。此の問題の解決は將來の研究に俟つべきものであらうが、思ふにアジヤ内陸の牧畜民は、古くから車行騎乗の兩形式と共に併せ用ゐたもので、それが奥地の遊牧民の場合には、車を専ら移動式住居に充當したのに對し、恐らく草原縁邊部の或る半定住的な文化の中から、馬に繋いだ輕快な戰車を馳せる特異な戦鬪の形式が發達したのであるまいか？ そしてメンギーン教授の様な雄大な想定が許されるならば、

これらの内陸牧畜民の群は、新石器時代以來、何等かの理由に基き、一定の間隔をへだてた大きな民族移動の波をして亞歐阿大陸の縁邊に溢れ出でる過程を繰返しながら歴史時代に入つたものと考へられる。若し此の過程が、歴史

時代に見られる様に、既に先史時代に亞歐大陸の東邊部にも及んでゐたとするならば、殷墟以來二輪の馬車の用ゐられた形跡を文字や畫像の上に辿りうるのは右の古代ヨーロッパオリエントに向つた戰車を中心とする民族⁽³⁾II文化移動の波と時代的にも相續くものであり、其後周末まで専ら

行はれた車戰の戰鬪形式が、紀元前四世紀の末、騎戰に長けた北狄の脅威に直面した趙の國から『騎射』の方法に變り、同時に乘馬用ズボンを用ゐる『胡服』の採用傳播となつた歴史は、恰も西方に於て紀元前十二世紀以來、騎馬遊牧民との接觸によつて進行した所の過程にひとしい。素より個々の歴史的事實の究明には、今後なほ嚴密な考古學的文献學的探究の道を歩まねばならぬとはいへ、亞歐大陸を東北から西南に貫く廣大な沙漠草原地帶を舞臺とする遊牧民族の敏速な機動性を前提として、東西兩洋の類似の過程の原動力を内陸アジヤに求める様な大膽な構想も、研究途上の作業假説としては、大きな價値と意義とを有するものであらう。

たゞ中國及びその邊疆の歴史にあつては、尙若干の問題が未解決のまゝに残されてゐることを附記しなければならぬ。その一はエルケスも指摘してゐる「左傳」隱公九年(714

北戎鄭ヲ侵ス。鄭伯之ヲ禦グ。戎ノ師ヲ患ヘテ曰ク、彼ハ徒シ我ハ車ス。懼ラクハ其ノ我ヲ侵軼センコトヲト。

其の後二世紀を隔てた昭公元年(531 B.C.)無終その他の北狄が太原地方に侵入した時にも、略々同様の記載を見る。

晉ノ中行穆子、無終ト群狄トヲ太原ニ敗ル。卒ヲ崇ブナリ。將ニ戰ハントスルトキ、魏舒曰ク、彼ハ徒シ我ハ車ス。遇フ所又阨シ。什ヲ以テ車ニ共セバ必ズ克タム。諸ヲ阨ニ困メバ又克タム。請フ皆卒トシ、我ヨリ始メムト。乃チ車ヲ毀リテ以テ行ヲ爲シ、五乘ヲ三伍ト爲ス。……翟人之ヲ笑フ。未ダ陳セザルニ之ニ薄リ、大イニ之ヲ敗ル。エルケスはこれらを以て中國北邊の遊牧氏が、馬そのものは既に久しく飼育してゐても、紀元前六世紀の頃迄は未だ乗馬も戰車も知らなかつた證據と考へてゐるのである。⁽³²⁾

だがこの問題の究明には、地勢を異にした塞内に侵入した場合に有利な戰鬪形式や、殊には畜群を伴ふ侵入を不可能ならしめた長城工事の當時に於ける實態などが先づ明らかにせられねばならないであらう。

その二是漢代の畫象石などから窺はれる馬匹繫駕の様式が、古代ヨーロッパやオリエントの遺物に見るそれとかなり本質的な相異を示してゐる點である。即ち後者にあつては、頸革と輪とによつて馬の脊柱よりも上方に牽引力の重點を託する所謂輪式繫駕 Nackenjochanspann が當初から

行はれた(口繪C 参照)。これは車戰に於て馬體に方向轉換の自由を最大限に與へる點では優れてゐるが、馬の身體の構造にとつては氣管を壓迫し、且何よりも牽引能力の充分な發揮を妨げる短所を有つ。それが今日の脊柱より下方の肩胛骨兩側に力點を置く胸部繫駕 Brustanspann の様式(第二圖1・2)に變つたのは、漸く紀元後十世紀以來のことであつた。然るにひとり中國にあつては古代から此の效率の高い胸部繫駕の原理が適用されて來たものらしく、西方の繪畫彫刻に見る前記十世紀以來の變化も、恐らく亞歐大陸東西交渉の活潑化に伴ふ、中國からの影響に起因するものではあるまいかと思はれる。第三圖は漢代の畫象石から復原した中國古代の繫駕の形式であるが、輪はこの際單に輪の前端を支へるためのもので、輪に連なる直接の牽引力は前胸部から兩肩胛骨で受けてゐるのである。即ち第二圖1・2に見る現代の頸圈 Kumt 或は胸革 Siele の原理にひとしい。⁽³³⁾ 頸椎と脊椎との接合點に輪を置く輪式繫駕は、馬よりも寧ろ牛の體格に適した世界共通の繫牛の形式であつて、多分有史以前から繼續して印度—オリエントに飼育されて來た牛の繫駕様式に倣つたものと思はれるのに對し、胸部繫駕は最も馬の體の構造にふさはしく、且北ユーラシアの犬や馴鹿を輪に繋ぐ牽引の原理とも略々一致してゐる。

これらの事實は東亞に於ける馬の利用の歴史に、亞歐大陸の西乃至西南部とは勿論、或

は中央部からも孤立したかなり

独自な發展の跡

を思はしめる資料ではあるが、

素より未だエル

ケスの言ふ様な

中國起源論を立

證するに足るものではなく、此等が結局如何に

のではなく、此等が結局如何に

大宛國ニ高山アリ。其ノ上ニ馬アリ得ベカラズ。因ツテ

五色ノ母馬ヲ取りテ其ノ下ニ置ク。與ニ交リテ駒ヲ生

ム。血ヲ汗ス。因ツテ號シテ天馬ノ子ト曰フト云フ。

とするされた傳説が、我々にとつては甚貴重な資料となる

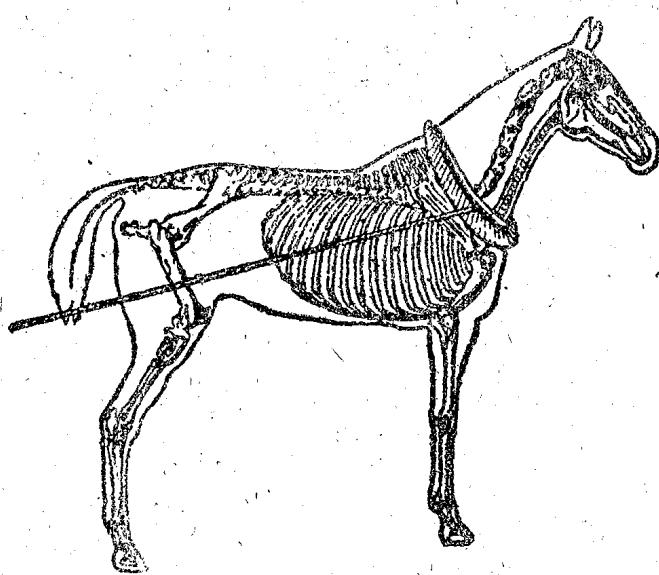
のである。私はスウェーデンの『蒙古公爵』ラルソン氏の

書中に、

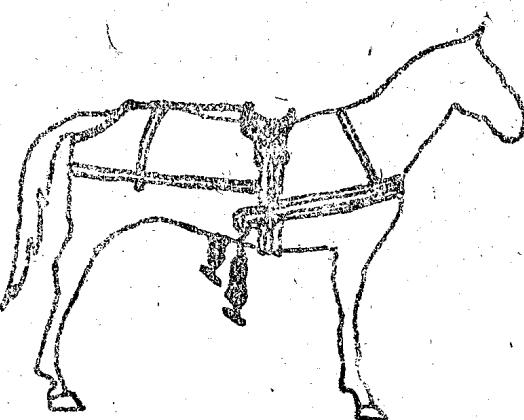
昔々ドンランの窟に、額に星をいただいた赤栗毛の種馬

ボサファボガ棲んでゐた。庶民も貴族も、そして大汗さ

へも、その種を宿さうと思つて彼等の牝馬をそのもとに



第二圖 1 現代の胸部繫駕樣式(頸圈)



第二圖 2 現代の胸部繫駕樣式(胸革)

漢武の世に至つて烏孫や大宛の名馬の問題を中心に、或

は屢々天馬の歌が作られ、或は朔北や甘肅の

水中から天馬が出現し

たといふ記事の正史に

録せられてゐることは

先に列挙した所であつ

た。『史記』の大宛傳に

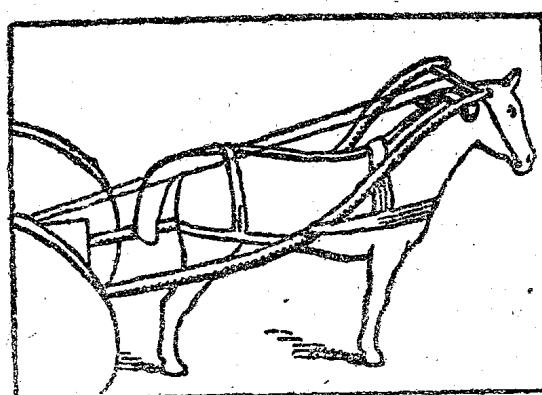
は汗血馬に言及して、

『其ノ先ハ天馬ノ子ナリ』と述べてゐる。こ

れらの『天馬』なるも

のに就ては、『前漢書』西域傳孟康の註に、

連れて來た。今日の駿馬はいづれもこのボサファーボの裔であるといはれてゐる。



第三圖 中國古代胸部繁駕樣式

といふ今日の蒙古人の傳説を紹介してゐるのを讀んで、Donranといひ Bosafabo といひ 本來の蒙古語に縁の遠いこれらの名稱の由來を怪んだものであつたが、その後マルコ・ポーロの東洋紀行中に、前漢の頃にはバクトリヤ王國の地であつたらしいオクスス河上流の Badascian (Badakshan) に、他の動物の馳驅しえない峻険の山地を疾走出来る堅牢な蹄をもつた駿馬の產することを記し、なほ遠からぬ昔まで此の地にはアレキサンダー大王の愛馬 Bucephalo の血を引いた神駿が澤山住んでゐて、いづれも Bucephalo と同様、額上に角もしくは印しを戴いてゐたが、今は絶滅してしまつたと聞く、と述べてゐるのを知つて現代蒙古人の神馬ボサファーボの物語も、恐らくはアレキサンダー愛用の名馬ブーケペラースの傳説が、中央アジア牧畜民の間を二千有餘年

に亘つて口傳耳承せられて來たものではあるまいかと一入深い興味を覺えたのであつた。ところがバクトリヤの北、大宛の高山の上に隠れて民間の牝馬を孕ましめた天馬の裔なるものに就ても、「西河舊事」の中には、

漢ノ武帝大宛ニ天馬有ルヲ聞キ、李廣利ヲ遣シテ之ヲ伐

ツ。始メテ此ノ馬ヲ得ルヤ、角有リ、奇ト爲ス。漢武天馬ノ歌ヲ賦ス。胡馬北風ニ感ズルノ思ヒ、遂ニ羈ヲ頓テ絆ヲ絶チ、首ヲ驥ゲテ去ル。晨ニ京城ヲ發シ、食時ニ燐煌ノ北塞山ノ下ニ至リ、嘶キ鳴イテ去ル。因ツテ其ノ處ヲ名ケテ候馬亭ト爲ス。今晋昌及ビ廣武ノ馬蹄石ハ石上ハ馬跡泥中ヲ踐ムガ若ク、自然ノ形アリ、故ニ其ノ俗號ジテ天馬經ト曰フ。

とあつて、之をマルコ・ポーロに見る有角堅蹄の名馬ブーケペラースの傳説と對比するならば、此の記事の決して漢人の創作になるものでないことを推知しうるであらう。しかし人力の達しえない場所に潜む神駿のもとに、人界の牝馬を放つてその種を求めるといふ上記の思想は、アレキサンダー傳説などとは別個に、西はカシミール、トルキスタン、アラビヤ、クルディスタンから遠く北ヨーロッパに亘る各種の説話傳承の中に傳へられ、東は甘肅、青海、貴州、四川、山西、山東など中國各地に就て古來の文献に跡を留めるのみならず、遠く我が日本列島では池月その他の駿馬

が池中の龍もしくは神馬によつて孕んだ仔であるといふ數多い名馬傳説ともなり、又水邊に牧を構へて龍種を求むといふ俗信をも生んだのであつた。⁽³⁷⁾以上の中には「干一夜物語」の『海の種馬』⁽³⁸⁾の様に、イスラム文化と共に傳播したと思はれるものもあり、又大陸の周邊では、駿馬の父となるべき神馬或は靈物が概ね水中に潜むなど、馬と水神信仰との關係にまで發展する問題を含むものもあるが、私はこの一系の説話並に俗信の中央及び西南アジヤに關するものが、概ね先に述べた西方の改良種アリヤン馬の中心地に就て傳へられるか、若くはこの地方と何等かの關係を示す所から見ても、この思想には、古く漢武の世に見られたであらう様なアリヤン系優良馬種による品種改良への熱烈な欲求が反映してゐることを感じずには居られない。だがそればかりではなく、その遠い根源は、家畜の牝を野生の牡と交らしめて強健な仔獸を得るといふ内陸アジヤに實際に行はれた牧畜習俗にまで遡るのであるまいかと考へてゐる。今日この習俗は、北アジヤの馴鹿遊牧民たるチュクチ、ヤクート、北方ツングースなどの間に見受けられ、⁽⁴⁰⁾又アラビヤ人の間にも牝驥を野生の牡驥に交らしめるために野外に繋ぐ習慣が存する様であるが、蓋しアジヤの草原に野馬の群棲してゐた時代には、馬に就ても同様の改良法が行はれたものであらう。先にも述べた様に、匈奴の如きは野生

の馬（駒駒）や野生驥馬（驥驥）を捕へて之をその畜群の中に加へてゐたらしく、又かうして捕へた野馬の優秀なものを神異化して尊重したこと、「前漢書」^{卷六}の元鼎四年秋馬渥洼水中に生じた記事に對する李斐の注に、

南陽新野ニ暴利長有り、武帝ノ時ニ當リ、刑ニ遇ウテ燉煌ノ界ニ屯田ス。數々此ノ水ノ傍ニ羣野馬ヲ見ル。中ニ奇異ナル者アリ。凡馬ト來ツテ此ノ水ヲ飲ム。利長先ニ土人ヲシテ勒靽ヲ水邊ニ持タシメ、馬ニ後シテ玩習之ヲ久シウス。土人ニ代リテ勒靽ヲ持チ、其ノ馬ヲ收メ得テ之ヲ獻ズ。神異ヲ欲シテ此ノ馬水中ヨリ出ヅト云フ。

とある所から之を知ることが出来るのである。要するに内陸の馬匹飼育民が初めは優秀な野馬、後には西方の改良種によつて牝馬に種付けしようとした記憶が、前記の傳説や説話となつて各種の牧馬文化と共にユーラシア大陸の周邊にまで傳播して行つた上、農耕社會の水神信仰とも結び付くに至つたものではないだらうか？

次に太陽の車駕を輓いて大空を翔る天馬の神話に就て一瞥を與へたい。この型の神話が嘗て中國にも存在したことは、此の國の古典の中にその殘片とも思はれる二三の資料を見出しうることによつて一般に確實とされてゐる。

朝ニ軽ヲ蒼梧ニ發シ タニ余縣圃ニ至ル 少ラク此ノ靈瑣ニ留ラント欲スレバ 日ハ忽忽トシテ其レ將ニ暮レン

トス 吾レ羲和ヲシテ節ヲ弭メ 嶠嶺ヲ望ミテ迫ルコト
勿ラシム 路曼曼トシテ其レ脩遠ナリ 吾レ將ニ上下シ
テ求索セントス 余ガ馬ヲ咸池ニ飲ヒ 余ガ轡ヲ扶桑ニ
惣ズ 若木ヲ折リテ以テ日ヲ拂チ 聊ク逍遙シテ以テ相
羊ス

歟トシテ將ニ東方ニ出ントス 吾ガ檻ヲ扶桑ヨリ照ス
余ガ馬ヲ撫シテ安カニ驅ク 夜皎皎トシテ既ニ明ク 龍
輶ニ駕シ宙ニ乗リ 雲旗ノ委蛇タルヲ載ツ 長太息シテ
將ニ上ラントシ 心低徊シテ顧ミ懷フ

——「楚辭」九歌 東君

これらの字句に就て考へるならば、羲和は古來日輪の御者として名高く、東君は日神を指し、転は車輪を支へる木、輶は車轔であるから、太陽の馬車の運行を歌つたことに疑はない。そして中國人の古代信仰が太陽の一日の運行を如何に表象したかは、右の「楚辭」の句を「淮南子」天文訓にいはゆる

日暘谷ニ出デテ咸池ニ浴シ、扶桑ニ拂フ。是ヲ晨明ト謂フ。扶桑ニ登リテ爰ニ始メテ將ニ行カントス。是ヲ朏明ト謂フ。……悲泉ニ至ツテ爰ニ其ノ女ヲ止メ、爰ニ其ノ馬ヲ息ム。是ヲ縣車ト謂フ。虞淵ニ至レバ是ヲ黃昏ト謂ヒ、蒙谷ニ至レバ是ヲ定昏ト謂フ。……九州七舍ヲ行キ五億萬七千三百九里アリ。

の言葉と對比するならば一層明かであらう。然るに馬が太陽の車を牽くといふ思想は、直ちにかの Phaeton が日の神 Helios の二輪車を御して失敗したといふギリシャの神話や、曙の女神 Eos (Aurora) の車を輶く天馬の繪を思ひ起さしめる。「リグ・ヴェーダ」では日の神 Surya も、曉の神 Ushas も、赤毛の駿足に輶かれて天翔るとせられ、インド、ギリシャ、ローマに共通してその馬の數を七頭とする信仰も存在した。「ゼンド・アヴェスター」にも亦屢々『不滅に輝く速き馬に依る太陽』の句を見、北歐の神話では太陽の侍女 Sol とその夫 Glaur の御する「頭立の戦車」や、美しい白馬 Skin faxi の牽く晝の神 Dag の戦車のことが傳へられてゐるばかりでなく、デンマークの Trundholm からは、青銅の馬と黄金を被せた太陽の圓盤とを載せた青銅製戰車像が發見された。⁽⁴²⁾ 而も同様の思想を我々は古代のセム族の間にも見出す。即ちバビロニアの古傳では、日神 Samas は天蓋の東門から蒼穹を横切つて西門に至るものとせられ、一説では二頭の悍馬に引かせた戰車によるとも、又快速の驃馬をつないだ車によるとも言ふ。⁽⁴³⁾ 「舊約」のヨシュアは、ユダの王達がエルサレムの祭壇に太陽のためにさゝげた馬をとり去り、日の車を火もて焼き棄てた。⁽⁴⁴⁾

これらの古代オリエント及びヨーロッパに共通した日輪

の車駕の傳承こそ、先に述べた西紀前第二千年紀の前半にはじまるインドゲルマンニアリヤを中心とした戰車民族

II文化の大移動と前後して、これら馬と戰車に依存する民族群の間から生れたものに相違ない。そして此の神話要素の中中國古代の記錄に跡をとめるることは、馬と戰車とが中國に根を下す過程と關聯して、その西方よりの傳來を思はしめるものがある。嘗てウキーンの支那學者メンヒエン・ヘルフエン氏は、今日知られてゐる中國最古の神話の一つである羿に關する諸の傳承が、古代ギリシヤのヘーラクレー

スのそれと著しい一致を示すことを指摘し、インドゲルマンの神話は普通人々の想像するよりも遙かに古い時代に中國に傳はり、更に東亞を越えて南北兩アメリカにまで分布してゐることを論じた。彼はヘーラクレースII羿の神話がインドに見出されず、恐らく直接ギリシヤから中國に傳はつたものであり、その中間關節としては中央アジヤの『スキタイ』的遊牧民を考へうことなどを述べ、ケイムブリッヂのミンズ教授も亦ギリシヤー古スユメールー中國の間に見る右の神話の一一致に觸れてスキタイの仲介説に賛意を表してゐる。⁽⁴⁵⁾けれども我々がその名を歴史上に知るスキタイや匈奴の様な騎馬民族以前にも、亞歐大陸の曠野を横切つて太平洋岸にまで西方の文化財を傳へた遊牧系民族の活動——例へばインドゲルマン戰車民の様な——の存したであらう

ことは、十分に想像しうる所であらう。

だが古代ヨーロッパやオリエントに見る太陽神話の場合と違つて、中國の『天馬』の語に至つては、比較的純粹な草原遊牧民の信仰を反映したものではないであらうか？之に就ては先づ中國古來の『天』の思想の由來と性格とを明らかにしなければならぬ。

十三世紀の蒙古朝廷を訪れたキリスト教國の使節や旅行家は、ルブルクも、プラノ・カルビニも、マルコ・ポーロも、みな異教徒の蒙古人が唯一人の上天神を信じてゐることを驚異の感を以て書き誌した。當時の蒙古人のかゝる『一神教』的信仰は、或はマニ教、景教、もしくは回教などの傳道によるものではあるまいかとは、一應考へられる所であり、現に東蒙古人やカルムイク、ブリヤートの上天神Khurmusta, Khormuzdaアルタイ・タタールのKurbustanなどが、イランの最高神 Ahura Mazda の轉訛であることは周知の事實である。また蒙古人が上天神を指す本來の語 tengri も、もと天そのものの意である所から、彼等がその大汗の尊稱に『神の子』『Khormuzda の子』の語を用ゐたのは、中國の『天子』の稱に倣つたもので、天の崇拜自體も中國人の信仰の模倣ではなからうかと考へられるかも知れない。⁽⁴⁶⁾けれども北ユーラシアの原始的遊牧民の信仰形態に關する研究が進むにつれ、寧ろ天の信仰は内陸の遊

牧民族にこそ固有のものであつて、猶太教、基督教、回教などに見る上天の唯一神も、儒教に見る天の思想も、寧ろこの種遊牧民族の信仰の系統をひくものと見る假説の方が有力視されて來てゐるのである。今この特殊の信仰に共通した固有の性格と思はれるものを概括するならば、次の様な特徴をあげ得るであらう。

一、この信仰にあつては、本來頭上に見る天空そのものを神と見たものの如くである。蒙古人は時々『蒼天』の語を以て上天神を表した。今日尙アルタイ系民族の多くは、東蒙古人及びカルムイクの tengri アリヤートの tengeri ヴォルガ・タタールの tängere ペルティールの tingir ヤクートの tangara チュヴァシの tura など、天を表現する語を以て多かれ少なかれ同時に神を意味してゐるばかりでなく、幾多のアジヤ極北民族やフィノ・ウゴル系民族も亦天そのものと上天神とに對して唯一つの言葉を用ひてゐる。ヘロドトス(I. 131)が古代のペルシャ人が全蒼空を彼等の神としてゼウスと稱したこと記してゐるのも、北平天壇にみる『皇天上帝』の語も、之と同一の思想を示すものであらう。

二、この信仰には天を以て世界秩序の攝理の力と見る合理的要素が著しい。蒙古語での攝理を表す džajagan は、丁度中國語の『天命』に相當する。イラン語の aša 「ヴ

エーダ」の rta も亦この自然と人生の運命を支配する世界秩序である。かうした世界秩序の支配者攝理者としての天といふ概念は、一望無涯の曠野にあつて、頭上に戴く天穹そのものの規則的な廻轉を不斷に觀察する遊牧民族の生活にふさはしいものであらう。⁽⁴⁸⁾此の種の合理主義的精神は、非合理的な超合理的 transrational な原始農耕民の思惟形式と顯著な對照を示す。

三、從つて上天神は、祖先神でもなければ太陽神でもなく、普通此等の神を表してゐる様な偶像を有しない。また彼等との發生的關係をたどりえないので勿論、その本來の形のまゝでは神話的存在となり得ないことは、蒙古人の tengri 中國人の天乃至上帝をはじめ、フィノ・ウゴル系諸民族の上天神の例が之を證してゐる。⁽⁴⁹⁾

四、古來内陸の遊牧民には、この様な上天神やその系統と思はれる人格化された神、もしくは天界に住む精靈を祀る供犧獸として、馬特に白馬を選ぶ傾向が見受けられる。一例を擧げるならば、シベリヤのヤクートは、第七層或は第九層の天をしるす最高神 Ürün ajy Tojon (自き創造主) に對しては馬だけを獻げて、牛との他の有角獸は用ゐない。又その精靈 abasy (pl. abasylar) に關しては、天界に住む abasy には馬のみを供へ、下界に住む abasy には有角獸のみを供犧する。匈奴の王が屢々天を祭つた

ことは「史記」や「漢書」からも窺はれるが、宣帝の世呼韓邪單于が漢の使者と諸水東山に盟約した時にも、白馬を刑して共にその血を飲み、敢て先に約に背く者は天の不祥を受けんと誓つたのである（前漢書・九四下匈奴傳）。

以上の様な知識を前提として中國古代の『天馬』を省るならば、その思想の由つて来る所は、案外に古く且遠いものがあることを豫想せしめる。『山海經』北山經中の『天馬』は白犬の如き黒頭の獸であるから、この語が天の馬の意味に於て文献に残されたのはさして古いことではないかも知れないが、同じく天に配せられる龍と結合した龍馬の觀念の萌芽は、『山海經』中でも最も早期の作の中に屬するとせられる中山經中にも見受けられ、河圖洛書の古傳とも併せ考へれば、春秋以前に遡るものかも知れない。就中『易經』說卦傳に『乾ヲ馬ト爲シ、坤ヲ牛ト爲ス』と曰ひ、更に『乾ヲ天ト爲シ、圓ト爲シ、君ト爲シ、父ト爲シ……良馬ト爲シ、老馬ト爲シ、瘠馬ト爲シ、駿馬ト爲シ、……坤ヲ地ト爲シ、母ト爲シ、……子母牛ト爲シ……』云々の句を見ることは、上記ヤクトトの信仰とも比較して、馬と天と元的な對立をなして、この國の陰陽思想の中を取り入れられたのではあるまいかといふことを考へさせる。尤も易の上經の坤の項に、『坤ハ元^{ホイ}ニ亨ル。牝馬ノ貞ニ利シ。……

牝馬ハ地類ナリ。地ヲ行クコト疆リ^{カギ}無シ』と言ひ、「春秋說題辭」に『地精ヲ馬ト爲ス。十二月ニシテ生ル』と説くが如きは、右と對蹠的な思想系統に屬するものであつて、エルケスは「詩經」大雅文王之什皇矣に見る『禩』の祭事とも併せて、これらを大地の女神としての牝馬を供犧する母權的な文化、恐らくは大地信仰と人身供犧とが大きな役割を演じた殷の文化に胚胎するものとなし、之に對して先の乾を馬と爲す様な原理は、遊牧的・父權的な西北部の文化に生れたものであらうと論じた。^[5]此の所説には必ずしも反対すべきものは存しないが、私は寧ろ本來馬そのものは、父權的な内陸遊牧社會の天の信仰と結合したまま中國文化の中に入り來つたもので、之が大地の崇拜を樞軸とする農耕的・母權的な社會に根を下す過程に、文化混交の所産として一部に牝馬を大地に獻する様な信仰形式を生じたものと解釋したい。かうした解釋が、少くともインドから東地中海に至る古代オリエントヨーロッパの歴史に就て妥當することは、之を牧牛の歴史と對照しつゝ、私の「河童駒引考」に論じた所であつた。私は中國古代文化の形成にあつても亦明かに性格を異にした南北乃至は東西二系統の文化的參與を認めざるを得ない。そして以上述べ來つた論據から、エルケス教授とは反対に馬と馬をめぐる諸の要素とは、右の中でも北乃至西北の内陸草原地帶に由來する遊

牧的・父權的・合理的・上天信仰的な文化の系統に屬するもの、否、馬の文化の文化の移動傳來そのものの主たる擔ひ手であつたところに應の假説が、今後の國の文化構成の過程を探究する上に少からず役立つのであると信ぜるものである。

—一九四七・八・一一—

〔附記〕本稿ははじめ「天馬と土牛」と題して「家畜としての馬と牛を中心とする中國古代文化を構成する」系統の要素とその關係とを民族學的資料から論じて見ようとしたものであるが、その中馬に關する問題のみで豫定の紙數を超過するに至つたため、牛の問題は茲に割愛し、後日稿を改めて別個に之を取り扱ふことにした。但私の思想の輪廓だけは、拙著「河童駒引考」第二章の中に、並んで牛馬と水神との關係方面から簡単に述べ置いた。

(4) J. G. Andersson: Archaeological Research in Kansu. The Geological Survey of China, ser. A., no. 5, Peking 1925, p. 17, fig. 5a. (樂森壽譜「中國考古誌」地質專輯第五號 地圖 1 圖頁 1 用圖 第五圖 a)

(5) 李濟驥「城子崖」 廣州 民國廿四年 一九頁。H. G. Creel: Studies in Early Chinese Culture. Baltimore. 1937, pp. 189, 191, 192-193.

(6) E. Erkes: ibid. p. 28. (cit. A. Conrady: Eine indochnesische Causativ-Bildung. 1896, Einl. p. XII.) (7) 西南支那から東南アフリカ半島に分布する諸族が馬を指稱する次表の如き語彙を、當該種族の系統・所屬・分布並に移動経路などを併せて考察を進めるなれば、其の問題の解明に多大の助駆を與くべし。

(1) ma 系統の語彙 *Siam* mā. *Lao* mā. *Shan* ma. *Tai* noīr mā. *Nung* mā. *Doi* ma. (K. Wulff: Chinesisch und Tai. København 1934) *Tho* ma. *Mán* mā (F. M. Savina: Guide linguistique de l'Indochine française. Tome I, Hongkong 1939, p. 141). *Damchin-* und *Limko* Li mā (H. Stübel: Die Li-Stämme der Insel Hainan. Berlin 1937, Tabelle III) *Lagree-Lolo* mo. *Hosie-Lolo* moh. *Nasö-pö-Lolo* mu. *Nyipa-Lolo* mm'.

(P. Boell: Contribution à l'étude de la langue Lolo. Paris 1899, p. 13)

(11) ma 係統の語彙 *Tibetan* ta (A. Bell: English-Tibetan Colloquial Dictionary. Calcutta 1920, p. 231) *Lepcha* on, ta (G. B. Mainwaring: Dictionary of the Lepcha-Language. Berlin 1898, p. 499) *Kachin* guma Chin si Karen kāti (Hanson: Dictionary of Kachin Language) *Ahs-i-Lolo* alum (Boell: loc. cit.)

(20) Boule, Breuil, Licent et Teilhard: Le Paléolithique de la Chine. Archives de l'Institut de Paléontologie Humaine, Mémoire 4, Paris 1928, pp. 45-46, Pl. X, fig. 8.

Bēndili-Li gā Zentr.-Li cá Süd-Li nā Weiss-Li ka
(Stübel: loc. cit.) Miao nèng Hoclo vē (Savina: loc.
cit.)

敏ニシテ 騎士 (Taw Sein Ko: Elementary Hand-book
of the Burmese Language. Langoon 1913, pp. 19, 20)
myin: là: (stallion) myin: ma (mare) myin: (pony)

Atsi 騎士 (Hanson: loc. cit.) myang 骑士 (Savina:
loc. cit.) ngü'a 骑士 mā 马 (馬) トムク ネロト フヤ 朱羅
騎士 級 (11) 類之属 (11) 騎士 (馬) トムク ネロト フヤ 朱羅
Alak sēh Lavé cèh Mahon cèh Kaseng sué Boloven

sè Sedang o'sè Bahmar o'geh Curu cè Jarai o'seh
Cam assaih Crai a'cèh Khmer sèh Stieng sèh Talaing

Ceh (Cabaton: Dix dialectes d'Indochine. Journal
Asiatique, 1905) —— 古事記本體廣義教の御教示に依る。

(10) R. Heine-Geldern: Südostasien. Illustrierte Völk-
erkunde hrg. von G. Buschan, 2. Aufl. Bd. II, Teil 1,
Stuttgart 1923, SS. 737-744. (小字脚) [譜] 「東南アフリカの
民族と文化」留保 17年 80-191頁。尤ムタイ族の移動
やカムハ語の所属などに就ては異論ある様である。

(9) E. Erkes: ibid. p. 28.

(10) 田島庫吉「大宛國の汗血馬」(明治三九年八月「東亞」
光) 1-4、「大宛國考」(大正五年二月「東洋學報」六)
1) —— 以上「西域史研究」上 昭和一六年所收。出石誠彦
「天馬考」(昭和五年六月「東洋學報」一八、三) —— 「支那
神話傳説の研究」留保 17年 所收。W. P. Yetts: The
Horse: a Factor in Early Chinese History. ESA IX,
Helsinki 1934, pp. 231-255. 等。

(11) 江上波夫「匈奴の奇畜・駄駒・驛馬・驛驥に就て」—
「池内博士還暦記念 東洋史論叢」昭和十五年 一八月—11
三七頁。

(21) A. Salmony: Sino-Siberian Art in the Collection
of C. T. Loo. Paris 1933, Pl. VIII 3. 月山山海經圖文

策 1' 11' 11' 國圖參照。

(12) W. P. Yetts: ibid. pp. 243-250. 口繪Aは 匾11回

1回所載の木板長方形圖也。

(13) E. Erkes: ibid. pp. 59-52, 49.

(14) R. Grousset: L'Empire des steppes. Paris 1939 (後

藤富夫譯「トムヤ遊牧民族史」10頁)

(15) 江上波夫「匈奴の住處」——「東亞學」第四輯 距程 1
七年 139-141頁。

(16) W. Eberhard: Untersuchungen über den Aufbau
der chinesischen Kultur. II Lokalkulturen im alten

China, Teil 1: Die Lokalkulturen des Nordens und

Westens. T'oung Pao, Supplément au vol. XXXVII,
1942. Reihe Das Pferd (cit. by Erkes; ibid. p. 48).

(17) E. Erkes: ibid. pp. 36-38.

(18) O. Menghin: Weltgeschichte der Steinzeit. Wien
1931, SS. 308-309.

(20) 大きいの馬齒は必ずしも銀銅色のものでない。中國
の同一種のレコードの遺跡をみると、アナウ馬や今日の西インジのそれ
らが見られてゐる。これが當時のものであるか、後世のもの
であるかは、其後に起つた河水の氾濫などの事情もあつて決
定し難い。又モヘンジードラコ及びハラツバーを通じて夥し
い動物畫像や彫塑の中に全然馬が現れて來なこのは、當時未
だ馬を知らなかつた證査と見られるけれども、之亦必ずしも
強力な論據となりえないとば、駱駒の例から考へられる。

—J. Marshall (ed.): Mohenjo-Daro and the Indus
Civilization. London 1931, Vol. I, p. 28.

(21) C. W. Woolley: Ur Excavations, Vol. II, The

- Royal Cemetery. New York 1934, Text, pp. 271-273; Pls. 90-93, 166, 181b.

(25) M. Hilzheimer: Die Anschirrung bei den alten Sumerern. Praehistorische Zeitschrift, Bd. XXII, Berlin 1931, SS. 13 ff.; derselbe: Über einige Rätsel aus der Geschichte der Haustiere. Zeitschrift für Ethnologie, Bd. LXIV, Berlin 1932, S. 140.

(26) de Mecquenem et V. Scheil: *in* Délegation en Perse, Mémoire XVII (*cit. by* W. Amschler: Die ältesten Nachrichten und Zeugnisse über das Hauspferd in Europa und Asien. Forschungen und Fortschritte, Jhg. X. 1934, Nr. 23/24, SS. 298-299; ders.: Die ältesten Funde des Hauspferdes. Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik, Bd. IV, Salzburg 1936).

(27) V. Christian: Untersuchung zur Paläoethnologie des Orients. Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien, Bd. LIV, 1924, S. 39 舊の馬の骨の歴史とその種類。H. G. Creel: *ibid.* pp. 185-188; E. Erkes: *ibid.* SS. 32-33.

(28) H. G. Creel: Studies in Early Chinese Culture. Baltimore 1937, pp. 188-189.

(29) J. Wiesner: Fahren und Reiten in Alteuropa und im alten Orient. Der Alte Orient, Bd. XXXVIII, Heft 2-4, Leipzig 1939, 92 SS.

(30) H. G. Creel: *ibid.* pp. 185-188; E. Erkes: *ibid.* SS. 32-33.

(31) E. Erkes: *ibid.* SS. 54-55.

(32) Lefebvre des Noëttes: La force motrice animale à travers les âges. Paris 1924, 138 pp.; L'attelage et le cheval de selle à travers les âges, Paris 1931, pp. 1-188, gravures hors texte 1-220; Maj. i. R. Wettedorfer: Brust-Joch-Anspann. Anthropos, Bd. XXXII, 1937, SS. 649-651. Lefebvre des Noëttes: La force motrice, Pl. II, Fig. 3 と 第11圖と は 区別。L'attelage, p. 122 の絵画と 区別。Wettendorffer: 古代馬の絵画。Anthropos 36, S. 651 の絵画と、第三圖と des Noëttes: L'attelage, p. 108 の絵画に據る。但第三圖の原本となる絵画は「原田惣人・駒井和愛「支那古跡圖譜」(昭和11年)圖版八の「吉林省武梁祠畫象石の1號」十の「吉林省東省武氏祠石室畫象石」の「同卷堂」の絵画と等しい。

(33) F. A. Larson: Duke of Mongolia. Boston 1930, p. 159.

Vorgeschichte, Bd. V, Berlin 1926, S. 221a.

(34) W. Amschler: Die ältesten Nachrichten und Zeugnisse über das Hauspferd in Europa und Asien. Forschungen und Fortschritte, Jhg. X. 1934, Nr. 23/24, SS. 298-299.

(35) H. G. Creel: Studies in Early Chinese Culture.

(36) J. Wiesner: Fahren und Reiten in Alteuropa und im alten Orient. Der Alte Orient, Bd. XXXVIII, Heft 2-4, Leipzig 1939, 92 SS.

(37) H. G. Creel: *ibid.* pp. 185-188; E. Erkes: *ibid.* SS. 32-33.

(38) E. Erkes: *ibid.* SS. 54-55.

(39) Lefebvre des Noëttes: La force motrice animale à travers les âges. Paris 1924, 138 pp.; L'attelage et le cheval de selle à travers les âges, Paris 1931, pp. 1-188, gravures hors texte 1-220; Maj. i. R. Wettedorfer: Brust-Joch-Anspann. Anthropos, Bd. XXXII, 1937, SS. 649-651. Lefebvre des Noëttes: La force motrice, Pl. II, Fig. 3 と 第11圖と は 区別。L'attelage, p. 122 の絵画と 区別。Wettendorffer: 古代馬の絵画。Anthropos 36, S. 651 の絵画と、第三圖と des Noëttes: L'attelage, p. 108 の絵画に據る。但第三圖の原本となる絵画は「原田惣人・駒井和愛「支那古跡圖譜」(昭和11年)圖版八の「吉林省武梁祠畫象石の1號」十の「吉林省東省武氏祠石室畫象石」の「同卷堂」の絵画と等しい。

(40) B. Meissner: Babylonien und Assyrien. Bd. I, Heidelberg 1920, S. 218. cf. Ebert: Reallexikon der

(35) A. C. Moule and P. Pelliot: Marco Polo, the Description of the World, Vol. I, 1938, ch. 47, pp. 137-138; H. Yule and H. Cordier: The Book of Ser Marco Polo, 3rd ed., London 1903, Vol. I, pp. 158, 162 note 4 (Bk. I, Ch. XXIV).

(36) 明 魏贊文編「天中記」卷五十五 馬 所引の文に據る。作者不明。清 張澍編輯「西河舊事」(川西堂叢書所収)に「太平御覽」より而用の者へ回の文を載す。

(37) 以上各個の事例に就ては、拙著「河童駒馬考」第一章参照。

(38) R. F. Burton (tr.): The Arabian Nights' Entertainments. Benares 1885, Vol. VI, pp. 8-9; J. H. Knowles: Folk-tales of Kashmir. London 1893, pp. 312-320; M. de Vaux Phalipau: Les chevaux merveilleux dans l'histoire, la légende, les contes populaires. Paris 1939, p. 177.

(39) 例へば漢代のベクトリヤの地に當ると思はれる隋唐の頃の吐火羅國に就ては、その頗梨山南崖の穴中に神馬ぬり、毎歲牝馬を穴の傍に牧するに必ず名駒を生み、皆汗血馬であると傳く(「隋書」卷八三 西域傳、「新唐書」卷一一一)。今日の青海省クク・ノールに關しては、

青海へ周廻千餘里、中ニ小山アリ。其ノ俗冬ニ經ニベ、無チ牝馬ヲ其ノ上リニ放ツ。言フ龍種ヲ得ト。吐谷渾嘗テ波斯ノ草馬ヲ得テ海ニ放ツ。因テ驥駒ヲ生ム。能ク日ニ千里ヲ行ク。故ニ青海ノ驥駒稱ス。——(「隋書」卷八三 西域傳「北史」卷九六 吐谷渾傳、「唐書」卷一九八 西域傳)

とある。

(40) W. Koppers: Konnten Jägervölker Tierzüchter werden? Biologia Generalis, Bd. VIII, Lief. I, Wien /Leipzig 1932, SS. 185-186.

(41) R. F. Burton: ibid. Vol. VI, p. 9, note 3.

(42) M. O. Howey: The Horse in Magic and Myth. London 1923, pp. 116, 121-122; 田村謙松「長跋」——「校讎通鑑傳說の研究」1922—1923年。M. Ebert: Reallexikon der Vorgeschichte, Bd. XIII, Berlin 1929, SS. 451b-452b, Taf. 76.

(43) L. W. King: Babylonian Religion and Mythology. London 1899, pp. 31-32; B. Meissner: Babylonien und Assyrien. Bd. II, Heidelberg 1825, SS. 19-20.

(44) 「元史綱目」川柳解 1 編

(45) O. Menchen-Helfen: Hercules in China. Congrès international des sciences anthropologiques et ethnologiques, compte-rendu de la première session, Londres 1934, pp. 202-203.

(46) Uno Harva: Die religiösen Vorstellungen der altaischen Völker. FFC No. 125, Helsinki 1938, S.141.

(47) ibid. SS. 141-143, 146.

(48) ibid. S. 145, 152.

(49) ibid. SS. 147-148.

(50) W. Joachelson: The Yakut. Anthropological Papers of the American Museum of Natural History, Vol. XXXIII, Part II, New York 1933, p. 106.

(51) E. Erkes: ibid. pp. 57-60.